

〈 礼拝説教 〉 2010年7月4日

災いなるかな、あなたたちは！

ハバクク書 2章 12～20節

マタイによる福音書 23章 13～22節

武田真治

1、聖書の読み方が試される

今日の箇所は、イエス様が当時のユダヤ教の律法学者やファリサイ派の人達に対して鋭い批判を浴びせられている言葉が記されています。この箇所は、現代に生きる私たちがここを読んで、どのように受け取るかで聖書の読み方が試される、良い箇所だと思っています。

まず、為してはいけない読み方としては、私たちもここでのイエス様と同じように、律法学者やファリサイ派の人々のことを批判して、悪口を言って終わりにしてしまうことです。あたかも自分たちに裁く権利があるかのように思うことは危険です。同様に、ここから現在のユダヤ教一般を批判する事も問題です。ここでイエス様から厳しく批判されている人達は、この時代特有のエルサレム神殿に対して異常なほどのこだわりを持っていた人達だからです。

では、どのような受け取り方が良いのでしょうか？

弟子たちや群衆に話された教えや言葉ならば、当然、私たちへの言葉としてそのまま受け取れます。ただ、聖書がこのような他の人達に向かって語られたイエス様のみ言葉を敢えて残して記録しているということは、その語られたみ言葉が私たちも十分に考えなければいけない問題や罪を表していると考えていたからだと言えます。それ故こうして残されて来たのだと。

確かに、当時の特殊なユダヤ教の一派に過ぎなかった人達でしたが、現代にも通じる「人間の陥りやすい問題性」を教えてくれているように思います。そのように今日の箇所を私たち皆に通じる「罪の問題」として受け止めて行きたいと願っています。

2、人々の前で天の国を閉ざす

まず『あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。自分が入らない

ばかりか、入ろうとする人をも入らせない』とあります。これは彼らがイエス様のことを信じないばかりか、他の人をも信じさせないようにしている状況を批判されている言葉です。そしてこれを現代のことと受け止めれば、自分たちの信仰や信心の方法が絶対に正しいと決めつけ、その他の信仰や在り方を認めない信心や宗教団体への警告と読めるのではないのでしょうか。

私たちは、ただイエス様のあわれみと導きによって救いへと招き入れられただけの者ではないのでしょうか？生涯に渡って、イエス様を見上げて生きていく者でしかありません。他の宗教や信仰を愚かだと批判して、自分たちの正当性や高等性を声高に主張することこそ問題です。そんなことを趣味にしてはいけません。先週の『あなたがたは「先生」と呼ばれてはいけない。だれでも高ぶる者は低くされる』というイエス様の言葉を思い出します。

三、改宗者を地獄の子にしてしまう

更に『あなたたち偽善者は不幸だ。改宗者を一人つくろうとして、海と陸を巡り歩くが、改宗者ができると、自分より倍も悪い地獄の子にしてしまうからだ』とも言われています。

ここでの「改宗者」とは、ユダヤ人以外の他民族からユダヤ教を信じるようになった人たちのことです。その意味で彼らは伝道熱心でした。しかし、改宗して信者になったとたんにユダヤ人になることを求めて「割礼」を強要し、ユダヤ教の大変な戒律や律法を背負わせたのでした。生まれながらユダヤの環境に育ったならば、ある程度の覚悟も出来たでしょうが、改宗者にはいきなりユダヤ人たちも背負えない程の重荷を無理やり背負わされることが待っていたのでした。それがここでの『自分より倍も悪い地獄の子にしてしまう』というイエス様からの告発の意味なのです。

思い出します事は、私が初めて洗礼を授けさせて頂いた方のことです。その方は、最初はある宗教団体に入っておられた方でした。その事情は、ご自身が病気になって家で寝ておられた時に、子どもを連れてその団体の方が訪問に来られ、お買い物やお世話をしてくれて、その方のお子様まで預かってくれたりしたそうです。それで病気が良くなってから御礼のつもりでその団体の・・・会館に行くようになり、勧められるまま信者の登録をしたそうです。しかし、信者になった途端に、あれをしろ、これをしなければならぬ、出来

るはずだ、しないと救われれないと言われ、次から次へと無理難題を与えられ、心身症になるほど追いつめられて、私たちの教会に助けを求めに来られた方でした。そして、ようやく安心と安らぎを感じられて、私が牧師になる按手礼を受けるのを待ってクリスマスに洗礼を受けられたのでした。

その方が以前に属しておられた団体のやり方は、まさに今日の箇所『改宗者ができる、自分より倍も悪い地獄の子にしてしまう』状態そのものではないかと思います。救われれないと言って、信者を脅すのですから、恐ろしいものです。

ただ、この言葉も私たちへのみ言葉として読まなければいけません。私たちも兄弟姉妹にそのような重荷を背負わせてしまっていないだろうか？奉仕や献金が出来るか出来ないかという目で見えていないだろうか？もし、礼拝に出ても地獄のような辛い思いをしなければならぬ人が私たちの教会の中におられるならば、この教会全体が悔い改めなければならないのです。

四、神殿の黄金にかけて誓う

今日の三番目の言葉は『あなたたちは「神殿にかけて誓えば、その誓いは無効である。だが、神殿の黄金にかけて誓えば、それは果たさなければならない」と言う。ものが見えない者たち、黄金と、黄金を清める神殿とどちらが尊いか』です。そして更にたたみかけて『祭壇にかけて誓えば、その誓いは無効である。その上の供え物にかけて誓えば、それは果たさなければならない』と言う。ものが見えない者たち』と続けておられます。

これらの批判は、一つには神様への誓いに対して、この場合は「無効」で次の場合は「有効」とかと自分たちで勝手に決めているところが問題であり、僭越であると言えます。また、両方とも「黄金」や「供え物」に対する誓いは「果たせ」という点を強調することで、献金や献げ物への約束はちゃんと実行するようと言っていることとなります。つまり、結局「お金や供え物にこだわっている」ということではないのかと。彼らの本音を鋭く見抜かれている言葉なのです。

その上でイエス様は『神殿にかけて誓う者は、神殿とその中に住んでおられる方にかけて誓うのだ。天にかけて誓う者は、神の玉座とそれに座っておられる方にかけて誓うのだ』と最後に語られました。つまり、お金とか供え物などに関係なく、「誓い」或いは「祈りや

願い」は、もっぱら神様とその人自身の間での事柄であると本筋をしっかりと定めて下さっています。

先程、紹介しました姉妹が、その団体に入って最も辛かったこととして話して下さったことは、入信した途端にその家全体の収入証明書を提出するようにと言われ、そこから「あなたはこれだけ献げられます」とその献金額が勝手に決められたことでした。ご主人はもちろん入信しておられない訳ですから、それだけの金額を抛出するのは本当に大変だったようで、子どものためのお金にも手を付け、盗むようにしてそれでも最初は支払っていたのですがやがてローン会社に借りなければいけなくなり、これでは駄目だと助けを求めに来てくださったのでした。その宗教に入ったことでまさに金の亡者、地獄の子にさせられてしまったのでした。私たちがそうになってしまったり、また、そうさせてしまっはいけないことを肝に銘じたいと思います。

五、「災い」ではなく「幸いなるかな」と

実は、この二十三章から二十五章は、言葉は変ですが「裏の山上の説教」と呼ばれたりします。

特に今日の十三節から始まる律法学者たちとファリサイ派の人々に対する言葉では、原文は『ウーアイ（災いなるかな）』という言葉が、十三節、十五節、十六節、二十三節、二十五節、二十七節、二十九節の各節の冒頭に置かれています。これは明らかに、あの山上の説教の最初の『マカリオイ（幸いなるかな）』という言葉が八回冒頭に続く「山上の祝福」（五章三節以下）と匹敵していると言われています。

例えば、その中の『心の貧しい人々は幸いである。天の国はその人たちのものである』は今日の『あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ』と。また『平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる』は今日の『自分より倍も悪い地獄の子にしてしまう』とが対応しているのです。まさに「裏の山上の説教」です。

私たちはイエス様から「幸いな者よ」と呼ばれる者でありたい。なかなかそうはなれないけれども、しかしせめて「災いな者よ」と呼ばれるようにだけはならないようにしたいものです。 （説教より抜粋）